告白5

山岡俊介

ジャーナリスト

フリーランスが

いちばん楽しい。

山岡俊介（やまおかしゅんすけ）ジャーナリスト

１９５９年８月８日生まれ。編集プロダクションで教育問題の月刊誌の取材や編集を経験し、独立。『噂の眞相』（噂の真相）や『週刊大衆』（双葉社）の専属記者を務めながら、数々の雑誌で精力的に記事を発表。政官財の腐敗を暴き続ける。２００６年５月から自前のニュースサイト『アクセスジャーナル』（有料）で情報を発信している。著書に、『誰も書かなかったアムウェイ』（あっぷる出版社）、『銀バエ実録武富士盗聴事件』（創出版）など。

武富士の盗聴を黙殺した大手マスコミ

――映画『ポチの告白』の終盤、ジャーナリストの草間が日本外国特派員協会で記者会見するシーンでは涙が止まらなかったそうですね。

山岡　僕はもともと涙もろいタイプで、犬が死ぬ映画でも号泣するんです。だけど、今回だけはなぜ泣いたのか自分でもわかりません。いわゆる〝泣かせる〟シーンではなかったし。あとから考えた理由ですが、おそらく草間の行動と僕自身の経験がリンクしたのだと思います。警察の違法捜査を撮影したビデオまで持ち込んでいるにもかかわらず、日本のマスコミは記事にしない。日本にいる外国メディアの特派員に頼るしかないという、あまりにも情けない状況に「わかる、わかる」という感覚で泣いてしまったんでしょう。

――日本のマスコミは書くべきことを書かないと。

山岡　ええ。

――そう思うようになったのはいつごろからですか。

山岡　フリーランスのライターとして取材、執筆しているうちに、徐々にそう確信していきました。ただ、決定的に「ダメだ」と思ったのは、「武富士事件」のときですね。

２０００年12月から２００１年２月まで、消費者金融大手・武富士（東京都新

宿区）の武井保雄会長（当時）は僕の自宅の電話を盗聴していました。武井氏は僕のことを、武富士に批判的なライターだと思っていたようです。僕や記者仲間、親しくしていたフィクサーの大塚万吉氏などの動向を探るため、（神奈川県）横浜市中区にある調査会社・アーク横浜探偵局を雇って盗聴していたのです。

このことは、中川一博・元武富士法務課長による僕への情報提供で発覚しました。中川氏は通話内容を録音したテープのほか、アーク横浜探偵局に支払った報酬の領収書、警察内部から譲り受けた前科者の資料、その見返りとしてビール券を配った警察官のリストなど、武富士や警察の犯罪行為を立証する様々な証拠資料を武富士から持ち出していました。俗に、「中川資料」と呼ばれています。この情報を得てから、いくつかのメディアで記事化を試みたのですが、ほとんどが「武富士は大スポンサーだから難しい」と最初から逃げ腰。結局記事が掲載できたのは『サンデー毎日』（毎日新聞社）を除くと、あとはすべて『創』（創出版）や『月刊ベルダ』（ベストブック）といったマイナーな月刊誌だったんです。

――山岡さんが武富士を刑事告訴した際に弁護士会館（東京都千代田区）で開いた記者会見でも、マスコミの対応はあきれるばかりでしたね。

山岡　僕は2003年5月27日、武富士、武井氏、アーク横浜探偵局の3者を電気通信事業法違反（盗聴）の容疑で警視庁に告訴します。これは、5月20日に中川氏が武富士に対する恐喝未遂容疑で逮捕されたことがきっかけでした。

【大塚万吉】
本名・趙万吉（韓国籍）。1950年1月28日生まれ。1990年代前半からフィクサーとして名前が登場する。1994年から1995年にかけて、オウム真理教による一連の事件が発生すると、オウムとマスコミをつなぐ窓口の役割を果たした。